花祭りにあたり、寺の住職が思うこと

多神教である仏教は、神と人間との関係を、神には大きな力があるが、本質的には、人間と同じであるととらえます。（一神教のユダヤ、キリスト、イスラム教では、神は創造主、人間をはじめ全てのものを作ったと教える。）

宇宙のすべての現象は、普通の法則に従って起こると考え、この真理を徹底的に理解し、そして人々に示したのが釈迦（ブッダ）なのです。

仏教は、神々の存在を真っ向から否定しません。

でも、「佛のほうが尊い」という態度を示すのです。

なぜなら、佛は、心理を悟った、真理を悟った佛のほうが、神々より格上であるとするのです。しかし、一方、神々は、佛を守り、教（おしえ）を広めることに貢献する、つまり、神々は、佛の守護神なのです。

日本では、佛の化身が神であるとすることから、神と佛は一体であると信じ、信仰してきました。「南無阿弥陀仏、助けてください、神さま、佛さま」という言葉が出てくるのは、そういう事なのです。日本人の心の内に千数百年にわたって「刷り込まれ」てきた日本人の考え方、しかし、最近では、「何でもありの宗教」となり、あまりにもあり過ぎて、宗教の本質が見えなくなって来ているのではないでしょうか。

その一つの例が、十二月二十五日、イエスキリストの誕生日。

日本人は大騒ぎをしてこの日を祝います。しかし、日本人が永年信じてきた佛教の開祖、釈迦の誕生日を日本人は忘れ去り、本来、先頭に立って祝いをせねばならぬ寺院すら、「花御堂」を飾ってお祝いをする寺が、どれだけあるのか？これを、本末転倒、といって笑ってはいられない。

佛教は、自分の信じる神佛はもちろんの事、他の人が信じる神佛も尊重する、というおおらかさから出ていると思えば、これも又、宗教による争いのない平和日本の良さかもしれない。

それでも、四月八日、甘茶かけに来て下さる方の少なさに反省がある。

『花御堂』の『屋根』を飾る材料です。今日は、「灌佛会」前日です。

朝から、あいにくの本降りでしたが、
小貝川の土手までいったり、境内の花からだったり、
何種類化の花びらを集めました。

『花御堂の屋根』を飾ります。

本堂に花御堂を組み立てて、飾り付けをしました。
『花御堂』の屋根に「花びら」を一枚ずつ貼り付けて行きます。
「花びら」は、「のり」で接着します。
接着剤には、「ごはん」で作った「のり」を使います。
　　まず、『花御堂』の屋根の「一辺」に、色合いを考えて貼り付けてゆきます。
完成したら、この面と同じように他の面を作り上げてゆきます。

花びらを貼り付ける作業が続きます。

新福寺の本堂で、「灯り」と「暖房」をつけての制作です。
二代の女性陣が、どんどん進めてゆきます。
ここ数年は、新福寺三代が制作に参加しています。

『花御堂』の完成です。

製作開始から約２時間。
今年も、りっぱにつくり上げることが出来ました。
「今日は、お釈迦様の『イブ』だね。
ケーキも贈り物もないけれど、明日のお誕生日は、晴れになって、
みんなに甘茶をかけていただけるといいね。」
完成し花御堂を囲んで、そんなお話をしました。

そして、『灌佛会』の当日、4 月 10 日になりました。
お釈迦様のお誕生日は、晴天、でした。
朝から、花御堂を本堂の前にお飾りして、
参拝者を待ちます。

六地蔵も春めいて見えます。
『灌佛会』の頃は、桜も咲いて、それまでよりも春めいてきます。
山門を入ってすぐ左の「六地蔵」も、春めいて見えます。
その前にある丸い鉢には、「蓮」を植えています。
数日前に、泥だらけになって掃除をしました。
初夏になると、このホームページを飾っている「蓮の花」が開きます。」

「花御堂」の奥には、阿弥陀如来像が。

新福寺の山門をのぞむお釈迦様。
「天上天下唯我独尊」とのお声が聞こえそうです。」

お釈迦様の足元に用意された「甘茶」です。

この甘茶を柄杓ですくって、お釈迦様の像におかけします。」

本日、何人目かの参拝者の方です。

籠の中には、花御堂を飾って余った花びらを入れておいたのですが、

そちらの方に目が移ってしまわれたよう。

でも、甘茶をかけて参拝して下さいました。